加藤敦典氏の書評へのリプライ

伊藤正子

拙著についての合評会を企画し今回の書評を書いてくださった加藤敦典氏、また本誌への書評の掲載を企画してくださった田中雅一先生と皆様にまず心よりお礼申し上げます。

加藤氏（以下、敬称略）が書評で指摘している点で筆者がリプライするべきと思われる点は以下の三つと考える。一つ目は「誰と誰が和解するのか。誰が誰として和解するのか」という問題である。二つ目は、小田実の評論『「難死」の思想』で論じられた概念を用いて、加藤が指摘する「日本人が自らを「難死」を経験してきた国民とみなすことで、たとえば、ベトナム戦争のもとで悲惨な目にあった民衆たちと自分たちを同化してしまうことにより、そこにもっぱら被害者としての連帯を求めてしまい、自分たちの加害者としての立場を忘却してしまう」という問題についてである。加藤は、以下のようにそれを言い換える。「ハミ村の虐殺の生き残りの人びとに共感するとき、私たちは誰として、誰とつながろうとしているのか」。また三つ目に、小田の言う意味のない「難死」が、現代のベトナム社会において、「公状況」と「私状況」の概念を用いてどのように説明されうるかについて、加藤の書評から示唆を得、ベトナム研究者としては考え直してみることが必要ではないかと思うに至った。

それではまず、一つ目の「誰と誰が和解するのか。誰が誰として和解するのか」という問題から考えたい。加藤の指摘は「当事者性」を問うものであろう。「和解」は「加害者側」の謝罪と「被害者側」の赦しによって、成就されるものと考えるが、当然ながら虐殺された死者がよみがえるわけではないので、「被害者側」は虐殺を生き延びた当事者である被害者か、虐殺された人の家族や近しい人、「加害者側」は、拙著で言えば、本当に虐殺に加わった兵士たちのうち、極めて少数の直接謝罪を試みたキム・ヨンマンのような退役軍人を除けば、この問題に関わった「加害者」の同国人となる。加藤はこの関係性を指し、「そこで生まれる和解とは、しかし、不思議な和解である」と言う。つまり、被害者側は当事者、若しくは当事者の近親者であるものの、加害者側として謝罪活動を行ってきたのは、ク・スジョンら若い世代の韓国人で、虐殺が起こっていた時期、まだこの世に存在していないか、存在していても赤ん坊の年齢に過ぎない人びとである。

ITO Masako　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　itomasak@asafas.kyoto-u.ac.jp

この当事者性については、責任回避の言説は論外として（戦争を知らない世代の戦争責任問題については、筆者は高橋哲哉の「「応答可能性」としての戦後責任」を引いて論じた（拙著 224–226 頁））、評論家で精神病理学者の野田正彰からも以下の指摘を受けた。

> 国や集団にとって、過去は歴史であって、記憶の問題ではないのではないか。個人が体験した出来事には記憶があり、それ故に抑圧も忘却もありえる。しかし、体験していない事件については、抑圧も忘却もありえない。無知や誤解や政治的主張があるだけだ。虐殺の村で生き残った人、惨状に駆け付けて目撃した人、事後を生き抜いた遺族らには体験があり記憶がある。ところが知らなかった人、虚偽の報道を信じてきた人には、そもそも体験がない。さらに被害者の記憶と、加害者側の市民や社会の記憶を、記憶という概念で結んでよいのか。何を体験し、どのような記憶を生きてきたのか、グループ分けして分析するべきでないのか[1]。

野田が指摘しているのは、「戦争の記憶」と「歴史認識」をいっしょくたにするな、ということであろう。加藤が感じた「不思議さ」は、この野田の指摘と根を同じくするもののように思われる。日本軍が虐殺事件を起こした中国の村で調査をした際の体験から、野田は、以下のように主張する。「自分が殺害したわけではないから、その行為を詫びるのはおかしい。そうではなくて、虐殺を起こした当事者たちに責任をとらせず、事実を否定し、歴史として記憶することもしない日本社会の一員であるから、そのような社会を許してしまっていることを詫びる」[野田 2014]。村人もそれを理解してくれたと言う。

筆者は野田の指摘は妥当であり、それが理想的な有りようであるとは思う。拙著においても、野田の指摘するような分類をするのが、学術書としてはふさわしかったかもしれない。しかし一方、ク・スジョンが家族を殺されたベトナム人遺族に殴られそうになったように、調査の過程で出会う生身の被害者から、〇〇国民と一括りにされて怒りの矛先を向けられた時に、咄嗟にそのような冷静で合理的な対応をすることができるか、今も自分には自信がない。

戦争の被害を実際に受けた人びとは、謝罪のことばを待っているのであり、戦争を起こした加害側国家がそれに応えない状況のもとでは、否応なく「〇〇国民」として「国家」に所属しているとみなされる現在の「国民国家」制度に縛られるわれわれは、やはり何らかの謝罪のことばを口にせずには事はすまないだろう。「戦争記憶と和解」以外に、「戦争についての歴史認識と和解」も、今後ますます必要になってくることが予測される。そのためには、事実の積み重ねとともに、それを公平に認識する能力が必要である。被害者に寄り添って癒しに貢献するク・スジョンのような役割が必要である一方、積み重ねられた事実から全体像を正しく認識し一歩引いたところから描ける歴史家がやはり必要なのである。そのような人材は「人文系学問は不要」という方針の国家のもとでは決して誕生してこない。

---

1 野田正彰「検証と和解の難しさ浮き彫り」（『野田正彰が読む』熊本日日新聞 2014 年 1 月 12 日書評）。

ちなみに、ベトナムでも 2015 年 11 月に、歴史科目が論争の的となった。中学校の歴史を選択科目にするべきという教育省の方針に対し、多くの歴史学者が反対するという構図であった。既に数年前から、ベトナムでは、大学入試で歴史を選択する受験生が激減しており、その上選択科目になれば、ほとんど歴史科目をとる生徒がいなくなるのではないかという懸念がある。歴史学者たちは、特に中国を意識して、歴史を学ぶことで民族独立の尊さ、重要性を理解でき、ベトナム民族の団結を強化することもでき、領土問題などを考えるための基礎を築くことができる、などを主な反対理由として挙げていた。歴史の重要性は、人類にとって普遍的なものを経験として記憶し学び取るためにあるのではなく、あくまで自国のナショナリズムの強化のためでしかないことはすこぶる残念である。

第二の論点は、日本人が、ベトナム戦争の虐殺被害者たちと自分たちを同化してしまうことにより、もっぱら被害者としての連帯を求め、自分たちの加害者としての立場を忘却してしまうという問題についてである。そして、「ハミ村の虐殺の生き残りの人びとに共感するとき、私たちは誰として、誰とつながろうとしているのか」と加藤は提起する。しかし、この二つは必ずしも同じことを言っていないのではないだろうか。前者は、ベトナムで韓国軍が起こした虐殺などを並べて、嫌韓をあおるネット右翼などを連想させるが、後者で、生き残りの被害者たちに「共感」する人びとは、必ずしも加害責任を認めない人びととイコールで結ばれるわけではない。一人の人間として、被害者たちの苦しみに寄り添い、拙著で取り上げたボランティアの韓国人青年たちとともに、被害を受けた村で一緒に活動した京都出身の日本人青年が過去にはいた。

第三の論点は、意味のない「難死」が、ベトナム社会では、「公状況」と「私状況」の概念を用いてどのように説明されうるかというものである。拙著で取り上げたような、ベトナム戦争の最前線で生じた数々の虐殺事件の死者やその遺族のなかには、現在、ベトナム政府から何の手当も受けてない人が多くいる。つまり、解放戦線に参加することもなく、ただ戦争に巻き込まれて亡くなった人たちは、意味のない「難死」というわけだ。「公」と関わりをもっていなかったかれらは、「ベトコン掃討」の名目によって米軍や南ベトナム軍、そして韓国軍によって殺されたわけで、その死は「私状況」のもとでの死でしかない。

現在、ベトナムでは「公状況」が「私状況」を圧倒している。だから、「難死」は、特定の博物館などごく一部でしか出てこず、テレビ放映などで繰り返し宣伝されるのは、「国家に貢献した輝かしい死」のみである。「国家は頑張った。国民も頑張った」過程で生まれた「栄えある死」ばかりを褒めたたえているかぎり、つまり「難死」に全く向き合わないので、戦争の真の悲惨さや戦争の虚しさを熟考するといった人間としての普遍的な課題を考察する方向には向かわない。ドイモイ（刷新政策）開始直後、中国の天安門事件が起こるまでの 2 年強の極めて短い時期に、それらを正面から描いた幾つかの優れた小説が発表された。例えば、作家バオ・ニンが従軍体験をもとに書いた『戦争の悲しみ』［1997］というタイトルの小説は、人民軍の兵士としての主人公のフラッシュバックするような回想が戦争の真実をあぶりだした見事な作品だが、「愛国心を弱める」として、軍からひどく批判され、作品はもっぱら広く海外で評価を得た。

一方、意味のない「難死」は、「無駄死に」と言い換えられるだろうが、日本の場合はこの「無駄死に」の語を避けることで、真実から目をそらしてきた。軍属として派遣されたニューギニアでの行為によって、BC 級戦犯として一度は死刑判決を受け、その後長く巣鴨プリズンで過ごした飯田進は、戦争の意味について深く思索した数々の著作を残しているが、朝日新聞への 2006 年 8 月の投書（飯田［2008］収載）が特に反響を呼んだ。

> 戦死した兵士の遺族たちは、最愛の肉親が野たれ死にしたとは思いたくない。それは人間としての人情なのである。誰も非難できない。小泉元首相も素朴な情念のおもむくままに正しいと思って靖国参拝を行ってきたに違いない。その心情は多くの国民、とりわけ遺族たちの心の琴線に触れるものがある。だがそこからは、あれだけの兵士を無意味な死に追いやった戦争発起と戦争指導上の責任の所在は浮かび上がってこない。「英霊」という語感の中に見事に雲散霧消してしまっている［飯田 2008: 4-5］。

自ら戦場を体験し、ニューギニアでの兵士たちの飢餓、つまりは「無駄死に」を目の当たりにした飯田の主張は、強い説得力をもつ。飯田は、2008 年 8 月 24 日に放映された NHK の番組「シリーズ BC 級戦犯（2）」で、以下のように語り、戦後日本社会が、戦争の意味を自ら総括することなく来てしまったことを強く批判している。

> 勇戦敢闘した兵士だけでなく、先ほど話したように、大多数の兵士は飢えて野たれ死にしたんです。それが何か今日の繁栄をもたらした原因であるとは、どう考えても納得できない。それは、事実に目を向けようという、簡単に言えばね、勇気がない。だからなんとなく曖昧なうちに過ごしてきたんじゃないですか。日本の戦後というのは一口で言えばそういうことですよ。敗戦を終戦と言った、退却を転進と言った、みんな誤魔化しとる訳ですよ。歴史を誤魔化してね、真実を見据えろって言ったってね、そりゃ言う方が無理ですよ。真実を見据えるためには、嫌なことに目を閉じないで、目を見開いて見なきゃいかん、と僕は思う。

このように、日本は国家・社会とも「難死」した人たちを「英霊」にして事実から目をそらし誤魔化して来たのであり、ベトナム、特に国家としてのベトナムは、意味のない「難死」を無視し視界から排除してきたと言えよう。そして、日本と同様、あるいはそれ以上に歴史を軽視しているベトナムでは、実は拙著に関心をもってくれた人は、知識人のなかにもほとんどいなかった。拙著の内容に関して、朝日新聞に短い文章を書き、それが英語と韓国語に訳された。韓国人からは非常に大きな反響があったのに対し、日本語と英語のわかるベトナム人の友人・知人に翻訳を送ってみたが、感想らしいものを返信してくれた人は皆無に終わった。

＜参照文献＞

飯田進　2008 『地獄の日本兵――ニューギニア戦線の真相』新潮社。
小田実　2008 『「難死」の思想』岩波書店。
バオ・ニン　1997 『戦争の悲しみ』井川一久訳、めるくまーる。